

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

## 2014年度 全統センター試験プレテスト問題

# 国 語 (200点 80分)

2014年11月実施

### 注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、44ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。  
 なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10
----

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。

# 河合塾





国

語

（  
解答  
番号

1

）

36

(配点 50)

1  
フイ<sup>(注1)</sup>

(ア)  
ボ

---

3

4

5

く、近くの対象はより大きく描くという方法だ。空気遠近法は例えば遠くの空や地平線はぼかして描き、近くの（ウ）ジュモクや家は明瞭に描くという方法である。

6 線遠近法は、厳密には幾何学的原理に則<sup>のつ</sup>っていて、ブルネッレスキはこの原理を発見し意識的にそれを踏まえて作図したから、遠近法の創始者と言われるのである。彼にとって遠近法は「遠くの物や近くの物が人間の目に映る縮小や増大を、十分に理性的に定める科学の一種」だった。

7 奥へ向かうすべての線が一点で交わるように描く線遠近法を一点透視図法といい、この点を消失点と呼ぶが、ブルネッレスキは一点透視図法によく適合する空間、一点透視図法によって容易に把握しやすい空間を聖堂の内部に作ろうとした。一つの消失点からの遠近感がはつきり感じとれる空間を築こうとした。

8 三次元の世界であっても、雲一つない青空などは我々の眼には二次元平面のように見えてしまう。空間として認識できないのだ。何かしらその空間に漸減感（消失点に向かって徐々に小さくなってゆく感じ）を出す物体のつらなりがあれば、つまり遠近感が感じられれば、我々はその空間を空間として認識できる。サン・ロレンツォ聖堂を建設するにあたり、ブルネッレスキは内部の空間を遠近感が明瞭に感じられる空間に構成した。

9 サン・ロレンツォ聖堂の身廊<sup>（注3）</sup>の中央軸線上に立って交差部の奥、アプス<sup>（注4）</sup>の方に眼を向けると、人は身廊の左右対称の円柱の列がアプスの祭壇を消失点としてきれいに漸減してゆくのを感じられる。このような厳密な遠近法的構成において中心になっているのは最奥の消失点なのだろうか。ジュウジ<sup>（エ）</sup>カ像の置かれたアプスの祭壇や聖人に捧げ<sup>ささ</sup>られた礼拝堂が遠近法の主人なのだろうか。そうではない。遠近法の展望において主人は消失点ではなく、消失点を凝視している人間なのだ。人間が自分の自由意志で消失点を決定し、そこからの空間構成を享受するのである。もしも消失点が祭壇と礼拝堂だけであるならば、神、そして聖人が遠近法の主人だということになるかもしれない。しかしサン・ロレンツォ聖堂では側廊<sup>（注5）</sup>の任意の一点に立ってその側廊の続き（あるいは背後の側廊）を見やっても、また交差部中央で祭壇を背にして正面扉の方向に身廊を見やっても、遠近感は強く感じられるのである。

10 遠近法は、見る人が空間を空間として認識できるようにする手段である。見る人間のための手段、人間が中心になった手段である。そしてこの人間は原則として不動であらねばならない。ある一点に立って、そこを動くことなく消失点を見つめてはじめて眼前に広がる空間が認識できるのだ。要するに、見る人間、遠近法の主人は、空間全体を幾何学的に把握する態勢を整えた理性的人間であるということだ。

11 中世の美術にはそのような不動の一点への執着はない。中世の美術を特徴づけるのは、逆遠近法である。中世のステンドグラスなりフレスコ画なりを見ていて気づくのは、奥の方にいる人物が大きく手前の人物が小さい（あるいは両者ともまったく同じ大きさ）、机が奥に向かうに従って幅広くなってゆく、といった遠近法とは逆の表現法だ。しかも、机に置かれた食器や書物が、上からの眺めと横からの眺めを同時に満たして描かれている。これは、セザンヌ<sup>(注7)</sup>後期の静物画からキュビズムの絵画へ発展していった現代抽象画の描き方と似た描写法だ。

12 何故こうしたことが起きたのかというと、それは、画面の制作者が遠近法画家のように画面の外側にいるのではなく、画面の内側に入りこみ、画面のなかの人物の視点からこちら（画面の外）を向いて机を眺めているからなのである。しかも、机やその上の食器、書物を眺める視点は斜め上から、真横からと多角的である。そしてさらに注目すべきは、この制作者は机上の一つ一つの物体に対してその近くに次々に移動して、このように多角的に眺めているのである。物が空間のなかでどのように見えるのか、空間内における見え方、その多様性がここでは追究されている。

13 そうして描きだされた事物は変形されていて、実際の事物とは似ていないかもしれない。しかし中世の画工が求めていたのは、実際の事物と絵画上の事物の類似ではなく、実際の空間と絵画上の空間の類似だった。我々が現実体験している空間の内側の全体が絵画において追体験されることを、求めていたのである。

14 我々はふだん、何らかの情景（環境）に取り囲まれ、その情景を内側から眺めて、生きている。C 中世の画工たちは、このように人間が日々実際に体験している情景の内部世界を、ばらばらに分解せずそのまま全体的に画面に再現しようとした。そうするために彼らは、自ら画面の空間内に身を置き、そこを浮遊した。さらに鑑賞者をもこの空間の内部体験へ誘った。

15 ルネサンスの画家はまったく逆に絵画空間の外に留まり、鑑賞者をも外に釘付けにする。画家（そして鑑賞者）は絵画と一対一の個の関係、主体と客体の断絶した関係を形成しながら、絵画を制作した。画家は絵画から独立した一個の個人であり続け、絵画の主人、絵画の遠近法的空間の主人であり続ける。芸術家の誕生だ。

16 中世にもむろん、すぐれた芸術的才能の持ち主はあまたいた。しかし彼らは、第一に職人であり、職人仲間、親方との関係のなかに自らの存在を消し去っていた。他者に対し自分の名と業績をひけらかすということはしなかったのだ。そしてもう一つ重要な点が、今見てきたような作品のなかに自分を投じる、作品のなかの人物と重なるという自己滅却の姿勢なのである。

17 芸術家という独立した個人はルネサンス期フィレンツェで生まれた。そこには、個々の市民の存在を尊ぶ政治思想、およびその具現といえなくもないフィレンツェの共和制が影響していただろう。もっと直接的には、傑出した芸術的才能の持ち主を神のごとく崇める当時のフィレンツェ人の趣味とそのような人材を発掘し際立たせるコンクール制度も影響していただろう。しかし芸術家の誕生で最も根源的な点は、作者が作品のなかに消えてゆかず、作品の外に個人として留まったということなのだ。

18 中世においては、主体と客体、制作者（そして鑑賞者）とその作品を分かつ分断線は不明瞭であった。このことは作品の在り方にも影響を及ぼさずにいない。制作者が個としての独立を拒んでいると、制作物の方もそのような非個体的なものとしてできあがってゆく。個の枠組、個の境界が不明瞭な場として存在するようになるのだ。そして、この場のなかに生み出された事物たちも、限定的な見られ方、象徴的な意味のソク（オ）バクを嫌って多様な面を見せ始める。ゴシック大聖堂の内部空間はまさにそのような不確かな場の世界なのである。大聖堂のなかへ入った者も、遠近法の主人のような堅固な理性的体制から抜け出して、諸感覚を同時に震わす曖昧な場に変容する。D 理性的自己の外へ出て恍惚境に入り、うつけ者のようになる。

19 大聖堂の内部を飾る装飾や典礼の音楽はどれも象徴機能を持たされて、聖書や聖書外典の挿話、異教の魔よけの伝承を指し示している。が、同時に象徴機能の仕事を逸脱して、自分が持つ独特の色、形態、響きをそれ自体として、何も指し示さないまま、主張している。大聖堂を訪れた中世の人々は、そこでキリスト教の教えを学びながら、いつしかステンドグラスの特異

な光それ自体に、パイプオルガンの音そのものに誘われて、さらには巨大な束ね柱の手ざわりや大理石の敷石の冷たさ、何百本ものロウソクの香りに感覚を刺激されて、学ぶ人から感動する人へ、個から場の人へ、変化していったのである。

(酒井健『ゴシックとは何か』<sup>さかいたけし</sup>による)

(注)

- 1 ファレンツェ——ルネサンス文化の中心地となった、現在のイタリア中部にある都市。
- 2 ブルネッレスキ——フィリッポ・ブルネッレスキ（一三七七～一四四六）。イタリアの彫刻家・建築家。
- 3 身廊——教会堂で、入り口から祭壇にかけての中央部分。
- 4 アプス——教会建築などで、内部から見て壁面が半円形または多角形にくぼんでいる部分。外側に壁が張り出すようなかたちで半ドーム型に作られることが多い。
- 5 側廊——教会堂で、身廊の左右にある細長い廊下状の部分。
- 6 フレスコ画——<sup>しつゝい</sup>漆喰と顔料によって描かれた壁画。
- 7 セザンヌ——ポール・セザンヌ（一八三九～一九〇六）。フランスの画家。
- 8 キュビズム——二〇世紀初頭のフランスで起こった美術運動。立体派。ピカソなどが有名。



問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①  
⑤

(ア)

ソウボウ

①

- ⑤ 資金のケツボウ  
④ ボウリヤクをめぐらす  
③ ボウキョウの念  
② 事件のゼンボウを知る  
① ボウオンの徒

(イ)

コンガン

②

- ⑤ 事態がコンメイを増す  
④ 突然のことにコンワクする  
③ コンセツ丁寧に教える  
② セイコン尽き果てる  
① サツコンの風潮

(ウ)

ジュモク

③

- ⑤ ジュモンを唱える  
④ 生活ヒツジュ品  
③ 通信をボウジュする  
② 新記録をジュリツする  
① テンジュを全うする

(エ)

ジュウジカ

④

- ⑤ 物語中のカクウの人物  
④ カビな服装  
③ 毎朝の運動をニツカにする  
② 物事のカヒを論じる  
① 先輩にカンカされる

(オ)

ソクバク

⑤

- ⑤ 新たなキバク剤となる  
④ コウバクとした空の下に立つ  
③ 秘密のバクロ  
② バクリヨウ会議  
① 自縄ジバク

問2

傍線部A「現在の繁栄を謳歌するために、教会堂を建てた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① フィレンツェの建築家は大富豪の依頼主と精神を共有しており、その精神とは合理主義の精神であったが、彼らの建立した教会堂は、そうした合理主義にもとづいて生み出されたものであったということ。
- ② フィレンツェの人々は、人間中心主義を推し進めることで繁栄を獲得したため神に対する関心を失ってしまい、そのため彼らの建立した教会堂は、神ではなく人間の理性の素晴らしさを表現したものになったということ。
- ③ 愛国主義と似たようなかたちで人間中心主義を標榜<sup>ひょうぼう</sup>していたフィレンツェの人々は、教会を自身の精神の表現と見なしていたため、彼らの建立した教会堂は、愛国主義と人間中心主義を象徴するものになっていたということ。
- ④ 自らの理性の力によって繁栄を実現させたフィレンツェの人々は、信仰を失っていたわけではなかったが、彼らの建立した教会堂は、実質的には神よりも自分たちの栄光を称えるものになっていたということ。
- ⑤ フィレンツェの人々は、人間の理性を重んじるあまり信仰の習慣を失ってしまい、結果的に彼らの建立した教会堂は、そうした自分たちのあり方をカモフラージュするために作られることになったということ。

問3 傍線部B「遠近法の本質は、人間中心主義なのである」とあるが、このように言えるのはなぜか。その説明として最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

① 遠近法とはルネサンスの美術を第一に特徴づけている技法だが、ルネサンスの時代の美術においては、それまでのように神や信仰の世界を表現するというあり方が見直され、人間とその理性の素晴らしさを誉め称えるというあり方が中心となっていったから。

② 遠近法による建築や絵画においては、中心となっているのは信仰にかかわる聖なる存在ではなく、作品のなかにいる人間そのものであり、そこでは作品中の一点から人間が理性の力で空間全体を把握することができるように、物の大小や図像の描き方などが工夫されているから。

③ 遠近法はルネサンスの時代に美術の世界で発展してきた技法だが、この時代には、遠くの対象は小さく描き近くの対象は大きく描くという空気遠近法だけでなく、幾何学的原理にしたがって世界を理性的に捉えようとする線遠近法までもが定着することになったから。

④ 遠近法による絵画や建築では、主役は空間を司る神などではなく、空間全体を外部から把握しようとする人間であり、絵画や建築そのものも、任意の一点にいる人間がその点から空間全体を合理的に捉えることを容易にするよう、幾何学的原理などに即して構成されているから。

⑤ 遠近法によって作られた美術においては、理性をもった人間である作者が事物の大小などを自由自在に描いてよいことになっており、そこには、世界は神によって作られるのではなく人間の理性によって作られるのだという考え方が、端的なカタチであらわれているから。

問4 傍線部C「中世の画工」とあるが、これについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 8。

- ① 客体としての作品を作り出すことで自らの才能を誇示しようとする芸術家とは違って、作品のなかに自らを没入させながら、自身の見えている世界をそのまま作品に再現しようとする者である。
- ② 個性の表出を抑え、事物をできるだけ合理的かつ客観的に描き出そうとする芸術家とは異なっており、むしろできるだけ個性を主張し、事物を主観的かつ多様なかたちで描き出そうとする者である。
- ③ 静物画やキュビズムといった複雑な様式を発達させていった現代の芸術家とは対照的に、自分たちが日々実際に体験している情景の内部世界をそのまま全体的に画面に再現しようとする者である。
- ④ 自分を取り囲んでいる情景や環境を内側から眺め、それを表現することで才能をひけらかそうとする芸術家とは違い、才能を誇示せず、自身の内的世界をそのまま作品で表現しようとする者である。
- ⑤ すぐれた芸術的才能をもち、それを遠近法などの技術を駆使してひけらかそうとしていた芸術家とは異なり、芸術的才能には恵まれていないが、職人的な技術にもとづいて実直に作品を制作する者である。

問5 傍線部D「理性的自己の外へ出て恍惚境に入り、うつけ者のようになる。」とあるが、それはどういうことか。その説明

として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

① ゴシック大聖堂のなかで典礼に参加する者は、さまざまな事物によって諸感覚を同時に震わされ、日常の自分とは異なった存在となり、理性をもった日常の自己をその外側から眺め、自分とは何かといった問題について思いをめぐらすようになるということ。

② ゴシック大聖堂のなかで典礼に参加する者は、そこにある色や形、音響や香りといったものによって感覚を刺激されて心を乱され、宗教というものを相対化するのに必要な冷静さを失ってしまい、神の教えをひたすら学ぶことしかできないような人間になってしまうということ。

③ ゴシック大聖堂のなかで典礼に参加する者は、そこにある独特の事物や事象によって諸感覚を震わされ、理性を失って、もはや宗教的な教えを学ぶことなど一向にできなくなり、ただその場の雰囲気陶醉するだけで何もできないような空虚な存在と化してしまうということ。

④ ゴシック大聖堂のなかで典礼に参加する者は、独特な刺激に感覚を混乱させられつつ、そうした刺激が何を意味しているのかを読み解くという行為に没入してしまうことになり、結局は理性を失って、神に仕えることに酔いしれるだけの存在へと化してしまうということ。

⑤ ゴシック大聖堂のなかで典礼に参加する者は、そこで色彩や形態、音や香りといったさまざまな感覚的刺激に心を奪われ、えもいわれぬその場の雰囲気と一体化して陶然とした気分になり、理性を働かせることを忘れた人間になってしまうということ。

問6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① 第3段落では、「神」が「口実」に、「神学」が「器」にたとえられており、そのことによって「神」や「神学」の内実が読者に詳細に伝わるようになっていく。

② 第8段落では、「雲一つない青空」の例を手がかりにして、三次元の世界と二次元の平面との違いという問題が、分析的に説明されている。

③ 第11段落には「ステンドグラス」や「フレスコ画」の話題が出てくるが、これらの話題は抽象画の技法を説明するためにあげられていると考えられる。

④ 第15段落の「芸術家の誕生だ」という表現は、ルネサンスという時代のなかでそれまでになかった新たな人間のあり方が生まれたということを示している。

(ii) この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 11。

- ① 第1段落～第3段落で具体的な事例を示したあと、第4段落～第10段落ではそれにまつわる問題を抽象化して説明し、第11段落以降は話題を転換して、最後にあらためて考察すべき問題がほのめかされている。
- ② 第1段落～第3段落で話題を提示し、第4段落～第10段落でその話題について深く考察し、第11段落以降は、それまでに説明してきたことと、それとは対照的なこととの違いを強調しながら論を進めている。
- ③ 第1段落～第10段落ではある特定の時代にかかわる問題が述べられ、第11段落～第13段落ではそれとは別の時代の問題が述べられ、第14段落以降では、再び最初に取り上げられていた問題が論じられている。
- ④ 第1段落～第3段落、および第4段落～第7段落、さらに第8段落～第10段落で、三つの話題が並列的に取り上げられ、第11段落以降では、その三つの話題をまとめたうえで、結論が述べられている。

**第2問** 次の文章は、辻井喬の小説「胸にはとはの」の一節である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。（配点 50）

完成披露があったのは先月のことだ。一月ほどのうちに少しずつ繁華街にある本社がこの郊外の建物に移転してくるのだと柳沢は聞かされていた。

5 どこといって、奇を衒ったところのない建築である。業種も文房具と事務用品の製造卸しなので先端技術を誇示する必要はなかった。わずかに、二階まで吹抜けになっている入口の部分と、避難階段に透明なアクリルを使い、丸味を持たせて装飾的におさめたところ、そして何よりも窓の深みの取り方とタイルを貼った全体とのバランスの優雅さに、有名な作曲家を父に持つ柳沢らしい感覚が表現されていると、披露宴に呼ばれた業界誌の記者や建築評論家は印象を述べていた。誰もこの建物の工事中に柳沢桂設計事務所で彼の片腕であった嶋木田慎介が墜落死したことを忘れているようであった。

それはまったく突然の出来事であった。

その日、嶋木田は、

10 「これからちょっと××社の現場を見て家に帰ります」

と言って、いつものようにちよつと片手をあげる挨拶を所員にして夕方の町に出ていったのだった。

柳沢はその時、立上って描きかけの新しい建物の概念図を覗きこんでいた。それは彼が卒業した大学の図書館と、それに隣接する学生ホールのプランで、アカデミズムを尊重しながらそれを超えようとする若さをどう建物に表現するか、彼はその数日神経を集中させていたのである。

15 しかし、嶋木田が「じゃあ」と言った時、彼は実はもうひとつ別のことを考えていた。それはブラジルに行っている息子のことであつた。

——こちらに来てから何時の間にか四年が経ちました——



とその手紙は書き出していた。

20 — 僕はこちらの女性が好きになりました。彼女は同い年でモニカ・望月・カルニセーロといいます。ずいぶんためらっていたのですが実は子供ができたのです。そうなってみると、僕はあなたのような経過は辿りたくないと思いました。子供は両親が揃っている空間に置いてやるべきだという、自分で考えても珍腐な、従来の僕らしくない考えになったのです——（この字は間違っているなあ。まあ今の若者にしてはあて字が少い方だろうが））と思いながら柳沢は、日頃若い所員の書いて来た文章を直す時の癖で、「珍」の字を色鉛筆で「陳」に直し、そんな作業に神経を遣っている自分にいささか腹を立てながら手紙を読み続けた。とかく連絡の途切れがちであった息子が「あなたのような経過は……」と書いて来たことに柳沢は傷ついていた。

25 その息子は柳沢が結婚する直前になって別れてしまった女とのあいだに出来た子供であった。なぜ別れてしまったのか、今になるとそれほどはっきりした理由はなかったように思えるのだが、当時は、生き方が根本的に違ふとまで思いつめていた。しかし、別れた時、すでに彼女の胎内には子供がいたのだった。その時は母親の世話になり、生れた子を引取って育てて貰ったのであった。多少甘やかされた嫌いはあったが、息子はそれなりに幸せな幼時を送ったと柳沢は思っていた。

30 この手紙で息子が柳沢のことを「あなた」と呼び掛けているのも気になった。だが、彼からすれば他に呼び方がなかったのだろう。その発見から、慚愧に近い感情が胸中に拡がるのを彼は覚えた。それは息子に対する罪の意識からではない。しいて言えば、自分の今までの生き方に対する重苦しい感情がもたらしたものであった。

35 柳沢は図面を覗きこんでいた時、ふっと幻聴のように聞えてきた慚愧の旋律に似た胸の軋しみに気を取られていたから、嶋木田の挨拶に「ああ」という具合に、相手の顔も見ずに片手を挙げて応えたのだ。彼の顔を見ていれば「地上から見ただけでいいよ」とか、工事用の「エレベーターから外に出るな」とか言っていたのではないか、不吉なものを予感して一言注意ができたはずだと、それが後からの悔みだと分つていながら残念に思った。

嶋木田は大学を出た柳沢が、建築界の大御所の設計事務所に入って修業していた時、四年して参加して来た後輩だった。彼は事務所を構える時、大御所に許可を貰って嶋木田を連れて独立したのである。登山愛好家でもある嶋木田は時おりばんやり考え

込む夢想癖のある男で、どんな時にも冷静さを失わないと言われていた柳沢とは正反対のようなところがあって不思議にうまが合った。それ以来十年以上一緒に働いてきた。

40 そんな彼を同じ事務所で働いていた木村あかねと無理遣りのように結婚させたのは柳沢だった。嶋木田には彼女のような、何事もテキパキと運んで男まさりの配偶者が必要のだと、若い所長の柳沢は考えたのであった。結婚後、なにかの折に顔を出す彼女は幸せそうだったから、二人の生活はうまくいっているのらしいと独身の柳沢は幾分羨しい気分であつたのである。それなのに嶋木田は、どうして梁から梁に渡した板の上を歩いて落ちてしまったのだろう。警察の現場検証でも不審なところは何も出て来なかった。

45 前の年の暮れにあわただしく行われた葬儀の日は曇っていて、雲でも落ちて来そうに寒かつた。気が付くと葬儀場の戸外を綿虫がたくさん飛んでいて、柳沢はこの虫たちは嶋木田を慕って病院から付添つて来たのではないかという錯覚に捕えられた。<sup>(注1)</sup> 事故現場からそれほど遠くない山に見える総合病院の庭にも、まだ原っぱが残っているから綿虫がたくさん、浮遊していたのだ。それとも、この虫は嶋木田の霊そのものなのだろうか。

柳沢は、父親が、蛭は魂が憧れ出たのだという意味の古い和歌をもとにした歌曲を作ったことがあったのを思い出した。子供の彼に父親は「こうしたものの見方はずっと昔から日本にあった」と言つて、和泉式部や斎藤茂吉の歌を教えたのであった。その時、父親が何故彼に難解なそんな話をしたのか、今になって考えて見ると不思議だつた。

「ほのぼのとのおのれ光りてながれたる蛭を殺すわが道くらし」

というような茂吉の歌は、その頃全く彼には理解不可能だったのだから。

55 今、柳沢は茂吉が「わが道」と呼んだのは歌人としての道だったのだろうかと考えた。とすれば「おのれ光りて」の「おのれ」とは彼が詠んだ作品を指すのだろうか、それとも「わが道」とは茂吉が終生かわつた病院経営のことを意味しているのか。経営者の役割を捨てたいのにそれが出来ないからわずかに歌を詠んでおのれを解き放す。そうして出来た作品は、まるで自分の創作物ではないように自分で光って遠のいていく、と茂吉は感じたのだろうか……。

60 **B** そう考えていつて柳沢は、いつのまにか自分が茂吉の歌の中に入っていることを知った。それはどちらかというと歌人や詩人を異質の人種と突離<sup>つきはな</sup>して考察し、冷静で合理主義者であることを自らも誇りにしてきた柳沢にはなかったことだった。もしかするとその頃父親は家長としての立場と、世界的な作曲家としての役割のあいだで悩んでいたのかもしれない、と柳沢は思っていた。

65 柳沢は今、設計事務所の責任者としての役割と、建物を創り出す仕事とは全く異質で、時とすると正反対であったりすることに疲れていた。所長とすれば厭<sup>いや</sup>な仕事でも利益があがれば取らなければならない。郊外に建てられた、文房具と事務用品の本社ビルはそんな仕事だった。いつも彼の気持を知っていたのは嶋木田なのだ。優しい彼はつまらない仕事はなるべく自分で引受けて、柳沢の精神的な負担を軽くしようと務めるのであった。彼はよく不精<sup>ふしょうひげ</sup>鬚を生やし、目を窪<sup>くぼ</sup>ませて夜遅くまで仕事をしていった。どちらかというと理が先に立って、とかく冷い空気を作り出しかねない柳沢にとって、彼は理想的な女房役であった。(嶋木田は僕のためにどれくらい自分を殺していたか分らない)と柳沢は思った。もしかすると彼は、このところ山登りもせず自分で押し殺してきた憧れの幻影を見て、それに気を取られて足を踏み外したのかもしれない。そう考えると **C** 悲哀の感情が柳沢の胸中に溢<sup>あふ</sup>れてきた。

70 それなのにあの時、自分は息子の手紙のことを考えていたのだと思った。しかし、あいつはなぜ「あなたのような経過は辿りたくない」などと書いて来たのだろう。あいつが何を知り、父親の胸のうちをどこまで理解していると言うのだ。

75 今度はゆっくりと憤りが彼の意識に昇ってきた。すると、  
「あんたはいつも自分のことしか考えていないじゃないか。理想だとか美とか言うけど、それがどうして一人の女の子を悲しませてもいい権利になるの? 何時そうなったの?」

と叫ぶように言い募る若い女の声が柳沢の耳に聴えてきた。若い柳沢はなぜ、彼女が急にそんな言い方で怒りを爆発させたのか分らなくて、ぼんやりしてしまい、黙って相手の顔を眺めていた。半年ほどして生れたばかりの赤ん坊を受け取った時、自分は女とはうまくやっていけない性質なのだと思った。しかしそんなことがあったから女が嫌いになった、というのではなかった。

ただ、同じ屋根の下で一緒に暮すのは気が重かった。

そうして時間が過ぎた。

80

子供はどんどん大きくなった。どちらかといえば温順<sup>おとな</sup>しい、いつも冷静に物事を見ているような感じが柳沢にはしていた。大  
学で生物学を学んだ息子はユネスコからの委託調査でアマゾン流域の生態系を調べに行ったのが動機になってブラジルに魅力  
感じたのらしい。卒業するとサンパウロ郊外に工場を持つ日本の会社の現地採用社員になり、その職場でブラジルの言葉と生活  
様式を学んでから二年後に公立の生物学研究所に入った。それは父親ゆずりの計画的で合理的なやり方だった。

85

「あなたはとても合理的で冷静よ。そして私には優しい。でも、決して<sup>(イ)</sup>破目を外すことがない人。一緒だと、私、息が詰まっ  
てくるの。御免なさい。でもそうなの」

そう言っ  
て柳沢から去っていった女がいたのを彼は覚えていた。ブラジルで仕事を続けていく以上、ブラジルの女性、しかも  
日系の女と結婚するのは合理的な選択である。しかし、そんなふうになっていると相手は疲れてくるぞ、と考えて、**D** 柳沢は自分  
が何か考え違いをしているのかもしれないと思い当った。

90

ブラジルに魅せられるということ自体、世間から見れば合理的ではないのだ。それに気付くと、あなたのような経過は辿りた  
くない、という文章のもうひとつの解釈が現れてきた。それは何もかも合理的にしているように見える父親への反撥<sup>はんぱつ</sup>なのだ。そ  
の証拠に息子は結婚しようとしていてではないか。

(そうか。でも僕はお前が考えているほど迷いのない合理主義者ではないんだよ)

95

と柳沢は遠くにいる息子に胸中で話しかけた。その時、なぜか彼の胸の中が痛んだ。きりきりと齒軋<sup>は</sup>りするような音を立てた。  
ある日、未亡人になったあかねが亡夫の形見を持って柳沢桂設計事務所にやって来た。彼女が差し出したのは嶋木田の結婚が  
決った時、山登りの好きな彼のために柳沢が贈ったピッケル<sup>(注3)</sup>だった。

「もう誰も使う者がいないので」

とあかねはゆっくりとした口調で言った。

「君は山登りはしなかったかなあ」

柳沢はかつて所員であった気安さで話しかけた。

「ええ、私と彼とは趣味で共通するものではありませんでした。所長さんのお薦め<sup>すす</sup>がなかったと思えます」

そう言った時、あかねは何だか恨めしそうな目で柳沢を見た。

「近いうちにゆっくり相談しよう。君の生活のことも含めて、食事でもしながら」

景気が少しよくなってきたからか、事務所の仕事は増えて来ていて、柳沢は慣れている助手が欲しいと思ってもいたのだった。その日も時々、強い風に乗って雪片が飛んでくるような寒い日だった。

あかねが帰ってゆく後姿を街に出て見送りながら、柳沢はさっきの彼女の眼差しを思い出し、嶋木田との結婚を少し強引なくらいに薦めたのは、意識してはいなかったが自分が彼女を好きになりかけていたからかもしれないと思い当った。するとまた胸中がきりきりと痛んだ。

（昔、胸が軋<sup>うず</sup>するというのは肺結核の時に限られていたのだが）

と、柳沢は自分の狼狽<sup>ろうばい</sup>を鎮めようとして、いくらかトンチンカンに考えた。これもまた自分の合理主義的な考え方からの連想なのか、と思うと、またしても胸のなかに金属性の摩擦音が鳴り出すのが聞えた。

（注） 1 綿虫——雪虫とも呼ばれる昆虫で、地域によっては冬の訪れを告げるとされる。

2 斎藤茂吉——歌人。精神科医（一八八二～一九五三）。

3 ピッケル——氷雪上の足場作りや体の確保などに用いる登山用具。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 12 ゝ 14。

(ア) 奇を衒った

- 12
- ⑤ 最先端を追っかけている
  - ④ 学のあるところを気取った
  - ③ 不思議な魅力を醸し出す
  - ② 賛否の意見の分かれる
  - ① 普通とは違う点をひけらかす

(イ) 破目を外す

- 13
- ⑤ 相手が嫌がることをする
  - ④ 興に乗って度を過ぎる
  - ③ 生活の規則正しさを破る
  - ② 情熱的に人を愛する
  - ① 人間的な温かみに欠ける

(ウ) トンチンカンに

- 14
- ⑤ 辻褄(つじつま)合わせに
  - ④ 落ち着きを欠いて
  - ③ あれこれと
  - ② 見当違いに
  - ① うろたえながら

問2

傍線部A「慚愧に近い感情が胸中に拡がるのを彼は覚えた」とあるが、このときの「柳沢」の心情はどのようなものか。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 子供ができたのに結婚して育てようとしなかった自分を、冷ややかな目で捉えた息子の手紙に接して、家族という形を避けてきた自分自身の生き方に向きあわざるを得なくなり、遺憾に思う気持ちが込み上げている。
- ② 両親に愛されずに生きてきたことを嘆く息子の思いの強さに触れ、息子の言うことすべてが正しいとは思わないものの、息子の苦渋を理解してやれなかったことに関しては、自分に責任があると思ひ恥じ入っている。
- ③ 自分と息子の母親が結婚しなかったことに息子が不満を持つのは仕方ないとしても、その不満が息子の結婚にも影を落としていることが明らかになるにつれ、息子の今後の生き方を危ぶむ気持ちが萌<sup>も</sup>しかけている。
- ④ 自分の母親に息子の面倒を託していたことを息子が快く思っていなかったことを知り、善<sup>よ</sup>かれと思っていたことも伝わらないことがあるという人の世の真実に突き当たり、自身の過去を反省とともに振り返っている。
- ⑤ 理想的な家庭像をたてに自分を父親と認めようとしないう息子の言い分もわからないが、自分と息子とでは生き方が根本的に違うのだから、息子との縁を断ち切ることにしても仕方ないと思ひはじめている。



問3

傍線部B「そう考えていって柳沢は、いつのまにか自分が茂吉の歌の中に入っていることを知った。」とあるが、このときの「柳沢」の心境はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

号は 16。

① 父が自分に教えた茂吉の歌の真意についてあれこれ考えるうちに、「蛭を殺すわが道くらし」という詩句から、嶋木田という有能な人材を喪った設計事務所の今後の暗澹<sup>あんたん</sup>たる道筋が想起され、そのなかで自分がどのように「おのれ」を活かしていけばよいのかに思いを馳せている。

② 茂吉の歌がどういう意図のもとに詠まれたのかはわからないが、「わが道」「おのれ」という自己へのこだわりを示す詩句に目を向ければ、父が芸術家と生活者とのあいだで悩んでいたことと、それとまったく同じ葛藤を自分自身が抱えてもっていることが重なり、不思議な因縁を感じている。

③ 父が取り上げた茂吉の歌について思いをめぐらすうちに、茂吉の歌の「わが道」や「おのれ」という詩句と、経営者と建築家という相容れない役割や仕事のあいだで疲弊する自分の姿とが結びつき、そのなかでどのように「わが道」や「おのれ」に向き合っていけばいいのかと、思い屈している。

④ 茂吉の「わが道」が、歌人の道と病院経営者の道のいずれを指しているのかは知りようもないが、自分の「わが道」が、嶋木田の死をきっかけとして、柳沢設計事務所の経営者としてではなく一介の建築家として「おのれ」を活かす道へと傾斜しつつあるのは止めようもないと達観している。

⑤ 父が茂吉同様に芸術家として生きるか否かに悩んだように、茂吉の歌の「蛭を殺すわが道くらし」という詩句は、異なる役割を背負わされた者がその一方を苦悩のうちに選択するあり方を「殺す」という強い言葉で表現したものであり、それは自分にとっても今後の課題になると実感している。



問4

傍線部C「悲哀の感情が柳沢の胸中に溢れてきた」とあるが、それは「嶋木田」が「柳沢」にとってどのような人物だったからか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 物事を冷静に見ようとするあまり仕事の場でも冷たい雰囲気を出してしまいがちな柳沢にとって、嶋木田の自己を主張しない活力あふれる陽気な振る舞いは救いであり、得がたい存在だったから。
- ② 柳沢設計事務所の立ち上げ以来、十年にわたって柳沢を支えてきたというだけでなく、柳沢にしてみれば歳の近い後輩としてその結婚相手も世話をするといったように、公私を問わず親身なつき合いをしてきたから。
- ③ 所長の柳沢にとって気の合う有能な片腕であり、自分の憧れを押さえ込み仕事の上でも自分自身を犠牲にしたと思われるほど、柳沢の気持ちを汲み取りその負担を軽くしようとしてくれた掛け替えのない存在だったから。
- ④ 柳沢にとって、所内のことに細やかに気を配り、献身的な仕事をする理想的な片腕であり、現実世界での自分を押し殺し仕事で疲れながらも、夢想の世界で自由に自己を解放することで折り合いをつける好人物だったから。
- ⑤ 柳沢が事務所を運営していくうえで必須の人材である以上、無謀なことを夢想しては挫折を繰り返す傾向があるだけに、危険な現場におもむく際には、息子のこと以上に注意を払うべきだったと思われる人物だから。

問5

傍線部D「柳沢は自分が何か考え違いをしているのかもしれないと思い当った」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 息子が成長するにつれ親譲りの計画的で合理的な一面を見せ始めたことを喜んでいたが、そうしたあり方はすべて父親である自分に反撥するために作りあげられたものでしかないということに思い至って、息子の恨みの深さに愕然がぜんとしているということ。

② 外地での息子の生き方は自分に似て合理的な選択によるものだと思っていたが、その選択が非合理的なものであったということに気づくと、息子が手紙で言いたかったことの核心に父親である自分のあり方への反撥がありそうだと思うということ。

③ 息子が日本を離れて生きる道を見出そうとした背景に自分への反撥があったことは認めざるをえないが、それ以降の生き方が父親である自分と同様のものであるのを知り、それが周囲に及ぼす影響については伝えておきたいと考えるようになったということ。

④ 合理的な振る舞いが周りの負担になることもあるということを息子には知っておいてもらいたいと思っていたが、息子がそのように振る舞うのは、父親である自分に反撥し、あえて自分に負担をかけようとしているからだということに、はじめて気づいたということ。

⑤ 外地の女性との恋愛や結婚が合理的選択だったとしても、その合理性は自分の考える合理性とは異なっていると思っていたが、むしろ息子はその違いによって父親である自分への反撥を強めようとしているのではないかと腑ふに落ちるような思いをしたということ。

問6 この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は 19 ・ 20 。

- ① 「柳沢」「嶋木田」という登場人物を示す表現に、「彼」という代名詞を織り交ぜることで、「嶋木田」だけでなく「柳沢」も、不安定な内面を抱えて破滅的な方向に進もうとしているさまが表されている。
- ② 10行目の嶋木田の言葉にある「××社」や、息子の手紙に関して17行目と19行目と21行目に出てくる「――」という表現は、柳沢に対して苦手意識をもつ二人が、言葉を濁してしまうさまをさりげなく示している。
- ③ 36行目に「建築界の大御所」、60行目に「世界的な作曲家」という表現が出てくる。これは、柳沢をとりまく人物を表現しているだけでなく、柳沢自身が「世界的」な「大御所」であることを暗示している。
- ④ 45行目から48行目に出てくる「綿虫」は、「嶋木田」の死や靈魂の象徴として描かれている。また「綿虫」の話自体が、柳沢の父や茂吉の歌のエピソード、およびそれについての柳沢の想念を導くきっかけとなっている。
- ⑤ 73行目の「あんたは」、84行目の「あなたは」で始まる発言は、外部の視点から柳沢の生き方を相対化するものであり、結果的に、他者との関わりに懲りて内向していかうとする柳沢の意識を導く役割を果たしている。
- ⑥ 32行目の「胸の軋しみ」、93行目の「胸の中が痛んだ」、107・108行目の「胸中がきりきりと痛んだ」などの表現は、柳沢が自分の人生について合理的に処理しきれないあり方に直面し、彼なりに苦悩するさまを効果的に表現している。

### 第3問

次の文章は『はにふの物語』の一節である。姫君は多くの人からの求愛を拒んできたが、都の堀川あたりに住む人からの恋文に対しては、衣の袖に返事を書いて送ったことがあった。しかし、侍女（本文では「侍従」）が、恋文の送り主の素性を調べたところ、その人が行方知れずになったことがわかった。以下の文章は、その姫君が石山寺に参籠している場面である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

石山の御宿坊は、少し引き入りたる所の静かなるが、<sup>(注1)</sup>何となくものすげなるに、<sup>(ア)</sup>昼は渡らせ給ひて、夜は御堂に御籠り所をしつらひて、御通夜をぞ申させ給ひける。<sup>(注2)</sup>二七日、御籠りあるべきなり。かくてほどなく一七日にあたりける夜の暁がたに、少しまどろみ給へる御夢に、錦の帳を押し開き給ひて、御年十七、八かとおぼしき御児の、紅に梅を縫ひ物にしたりける水干に、<sup>(注6)</sup>大口召したりけるが、御手に衣の袖を持たせ給ひて、<sup>(注3)</sup>「言の葉今は返してん」とのたまひて、たまはりければ、何とは分かねども祈ることのかなひけるようれしくて、たまはりぬと思し召して、夢うちさめにけり。<sup>(注4)</sup>夢のうちのうれしさも変はらず、胸うち躍りて、御手にもの持ち給へるを御覧ずれば、まさしく夢にたまはりつる衣の袖なりければ、不思議と思ひ給ひて、よくよく見給へば、一首の歌あり。<sup>(注5)</sup>

A 白露にそめぬものから菊衣かさねてなどか人のとふらむ<sup>(注7)</sup>

とありけるは、堀川へんよりとて文のありし、その御返事にみづから詠みてつかはせし歌、衣の袖なり。これはいかなりしことにかと、夢ともうつつともおぼえず。「この主は思ひに耐へかねて行方も知らずなりぬ」と申し侍りしほどに、あはれにかなしく思ひ侍りて、つねは、この文の書きやう、歌のさま、思ひ入りたるやうに、<sup>(イ)</sup>心にくく思ひ侍りしに、さほどに慕ふ色もなくて知らずなりぬることのみ思ひつるに、いかなることにかと見えつる夢の面影、身に添ふ心地して、ただあきれ給へるばかりなり。このこと、侍従にのたまひたくは思ひけれども、夢の面影の忘れがたく思ひ召すことを、はづかしきことにのみ思ひ

給ひて、衣の袖をも深くしのばせ給ひけり。

かくて二、三日の過ぎけるほどに、御籠り所近き局（つばね）に人の通夜しけるとおぼしくて、よそほひのありけるほどに、深くしのび給ひけり。夜も明けゆくほどにやありけん、通夜し侍りける人下向（げかう）し給ふかとおぼしくて、あまたの音（い）して出でさせ給ひけるほどに、何となくほのかに見給ひければ、ありつる夢に少しもたがはぬ児にてましましけり。胸うち騒ぎ、言の葉もなき心地し給ひけり。宿坊に帰り給ひても、ただうち臥（ふ）して案じ入らせ給ひけるこそ、年月の人の思ひの積もりける報いなるべし。

女房たちは、このほどのくたびれに、かなたこなたに休みけるひまに、夢に見給へ（d）る衣の袖を取り出だし、御覧ありければ、いろいろのことどもを書きつけ給ひ、「祈ることのかなはずは、ただ命を取り給へ」と書きつけて、「形見こそ今は仇（あた）なれ」とありけり。この心は、業平（なりひら）の中将、津（つ）の国へ下り給ひける時、二条（ふでづか）の后に筆柄の紋の錦の守りを形見に参らせられたり。中将、  
遅く上り給ひければ、形見を取り出でて、

形見こそ今は仇なれこれなくは忘るるひまもあらましものを

と書き給ひて、形見を中将のかたへ返し給ひけるとなん。この衣の袖を身に添へては、いとど思ひの種となればや、願書（ぐわんしょ）など  
のやうに心のうちに祈ることどもを書きて、御厨子（ごし）のうちに籠め給ひけるを、仏もあはれと思し召してみづからに返し給ひけるかなどと、心ひとつに思ひ続け給ひけり。「言の葉今は返してん」と、夢の中にのたまひしを、つくづくと思へば、

頼め（注14）こし言の葉今は返してん我が身はるれば置き所なし

と言へる歌の心にて侍りけり。かなたこなたよりの文どもの中に、この御主のことは心も通ふやうに侍りしを、仏も知らせ給ひて、「頼め（注15）こし」と言へる歌の言の葉を、示現（じげん）にあらたにかうぶりけるよと、よもやまのことを今さらに思ひ続け給ひけり。今は、いつしかこの衣の袖をのみ、「おのがものから」と御身を放ちがたくぞ思ひ給ひける。

(注)

- 1 石山——石山寺のこと。滋賀県大津市にある。
- 2 通夜——仏堂に夜通し籠って勤行すること。
- 3 二七日——十四日間。「二七日」は七日間。
- 4 児——ここでは、成人前の男のこと。
- 5 水干——衣服の一種。成人前の男の晴れ着などに用いた。
- 6 大口——大口袴ばかまのこと。裾口が広い袴。
- 7 菊衣——菊襲きくがさねの色目の衣。
- 8 業平の中将——在原業平。ありわらのなりひら 平安時代の歌人。
- 9 津の国——摂津国。大阪府北部と兵庫県東部にわたる地域。
- 10 二条の後——藤原高子。業平の中将と恋仲にあったと言われる。
- 11 筆柄の紋——筆の柄の模様。
- 12 願書——仏への願いなどを書きつづった書面。
- 13 厨子——戸のついた入れ物。
- 14 頼めこし……と言へる歌——『古今和歌集』恋四に「頼めこし言の葉今は返してん我が身ふるれば置き所なし」(藤原因香よるか)とある。
- 15 おのがものから——「今はとて返す言の葉拾ひおきておのがものから形見とや見む」(『古今和歌集』恋四・源能みなもとのもよみ有)を踏まえている。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

(ア) 何となくものすごげなるに

21

- ① どこもかしこもすばらしい所で
- ② いつになく静かなありさまなので
- ③ 漠然と厳かさを感じさせるものの
- ④ どことなく寂しい様子であるなかで
- ⑤ 非常に神秘的な雰囲気であったが

(イ) 心にくく思ひ侍りしに

22

- ① 心惹かれるように思いましたが
- ② 腹立たしい内容だと感じられましたので
- ③ 癪にさわるほどすばらしいと感じて
- ④ つつましく奥ゆかしい感じでしたから
- ⑤ あまりよいとは思われなかったため

(ウ) 遅く上り給ひければ

23

- ① のんびり参詣なさったならば
- ② なかなか上京なさらなかったため
- ③ 深夜に参上なさったため
- ④ 遅れて参りなさったところ
- ⑤ 愚かにも上京なさらなければ

問  
2

波線部 **a** と **d** の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

24

- |   |          |        |          |          |          |          |          |         |
|---|----------|--------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|
| ⑤ | <b>a</b> | 使役の助動詞 | <b>b</b> | 伝聞推定の助動詞 | <b>c</b> | 動詞       | <b>d</b> | 完了の助動詞  |
| ④ | <b>a</b> | 尊敬の助動詞 | <b>b</b> | 伝聞推定の助動詞 | <b>c</b> | 動詞       | <b>d</b> | 動詞の活用語尾 |
| ③ | <b>a</b> | 尊敬の助動詞 | <b>b</b> | 断定の助動詞   | <b>c</b> | 伝聞推定の助動詞 | <b>d</b> | 完了の助動詞  |
| ② | <b>a</b> | 使役の助動詞 | <b>b</b> | 伝聞推定の助動詞 | <b>c</b> | 伝聞推定の助動詞 | <b>d</b> | 動詞の活用語尾 |
| ① | <b>a</b> | 尊敬の助動詞 | <b>b</b> | 断定の助動詞   | <b>c</b> | 動詞       | <b>d</b> | 完了の助動詞  |



問3

傍線部X「言の葉今は返してん」とあるが、姫君は、この言葉に兎のどのような気持ちがこめられていると考えたか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

- ① 姫君への叶<sup>かな</sup>わぬ恋の恨みを手紙で伝えるだけでは飽き足りず、たとえ夢の中であってもよいから、直接姫君にそれを伝えたいと願う気持ち。
- ② 姫君から送られた歌に込められている思いを、確かに受け取ったということを示すために、歌とともに送られてきた衣の袖を、姫君に見せようとする気持ち。
- ③ 姫君から送られた衣の袖は返さねばならないが、その代わりに、姫君が今、歌を詠んでくれたら、自分はそれを心の支えにできるだろうと期待する気持ち。
- ④ 石山寺の仏の導きで姫君の夢に現れて思いの丈<sup>たい</sup>を述べることができ、満足したので、今はもうこの世に対する未練は何もないという気持ち。
- ⑤ 姫君の返事を今まで心の拠<sup>よ</sup>り所にしてきたが、これ以上それを手もとに置いていても、姫君が恋しくつらいばかりでどうしようもないという気持ち。

問4

本文中の和歌Aに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

26。

① 「そめ」に「染め」と「初め」の意味を掛けて、菊の花が白露によって色鮮やかに染まるように、児に好感を抱き、思いを寄せはじめるという、姫君の心情の移り変わりを詠んだ歌である。

② 二句切れになっており、白露のようにはかない命しかない自分が、現世では姫君と結ばれるはずがないことを嘆き、姫君にせめて死後の供養をしてほしいと願う、児のつらい気持ちを詠んだ歌である。

③ 「白露にそめぬものから菊衣」は「かさね」を導く序詞じよごしほで、少しも心を動かさない姫君に懲りることなく再び恋心を訴えてくる児に対して、姫君が拒絶する気持ちを伝える歌である。

④ 「白露」は涙の比喻になっており、返事さえもらえない苦しみに衣の袖を涙で濡らしながらも、姫君に恋文を送り続けずにはられない、児の切ない思いを訴える歌である。

⑤ 「かさね」には、衣に関わる「襲」かさねと、「もう一度」という意味の副詞「かさねて」の一部が掛けられており、二度と児に返事を送るまいと決心しても、つい返歌をしてしまう姫君の心の揺れを表す歌である。

問5 この文章における、児に対する姫君の心情の変化の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 27。

① 最初は、夢に現れ衣の袖を残していった児が誰なのかわからず、何を告げる夢なのかと不思議に思う一方で、見知らぬ児をなぜか忘れがたく思った。しかし、寺で児によく似た人を見かけたり、児の残した衣の袖に書かれた歌を見たりするうちに、この児とはいつか現実にくぐり合って結ばれる宿縁があるのだと信じるようになった。

② 最初は、夢に現れた児から渡された衣の袖を見て、それは昔自分が恋文の返事として人に送ったもので、恋文を送ってきたのは夢に現れた児だったとわかり、気に掛かって忘れられなくなった。その後、現実に見かけ、衣の袖に書かれた言葉や夢の中で掛けられた言葉の意味を考えるうちに、ますます児への思いを深めていった。

③ 最初は、夢に現れた児から渡された衣の袖が、目覚めた後手の中にあることについて、ただ不思議に思うばかりで児のことをそれほど気に掛けはしなかった。さらに、衣の袖に書かれた言葉を見て、夢の中の児との会話を思い出すうちに、その児がかつて自分に求愛した男だったことに気づいたが、好意を抱くには至らなかった。

④ 最初は、児が夢に現れて自分に衣の袖を渡した理由がわからなかった。しかし、袖に書かれていた言葉と児が口ずさんだ歌の一節によって、児が自分への思いを残しながらこの世を去ったことを伝えるために現れたのだとわかり、自分を慕ってくれた児の形見として、せめてこの衣の袖を大切にしようと思うようになった。

⑤ 最初は、夢に現れた児が自分に恋文をよこした人物だったことを知っても、恋文を受け取った時と同様、児を恋い慕う気持ちは持てなかったため、周囲の人にその夢の内容を告げようとも思わなかった。しかし、実際に児の姿を見、夢が仏の導きだったのだと思うにつけ、児を恋の対象として意識するようになっていった。

問6

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

28。

- ① 児は、姫君への「思ひに耐へかねて」行方をくらました後、石山寺に参籠し、「通夜し」ていたのだが、姫君も石山寺に來たことを知ってつらく思い、「夜も明けゆくほど」に帰京した。
- ② 侍従は、姫君が「夢の面影」を忘れられずにいることについて、他愛ない子どもじみたことで「はづかしきこと」だと思っていたが、あえてたしなめることはせず、黙って見守ることにした。
- ③ 業平の中将は、二条の后を恋い慕うあまり、后に送った衣に「祈ることのかなはずは、ただ命を取り給へ」と、思いを訴える言葉を書きつけたが、その願いもむなしく、恋は成就しなかった。
- ④ 二条の后は、業平の中将が「津の国」へ行ってしまったので、中将が自分のことを忘れてしまうのならば、形見の品を与えるのではなかったと後悔し、「形見こそ今は仇なれ」と詠んだ。
- ⑤ 姫君は、求愛する多くの人の中で、児には「この御主のことは心も通ふ」と感じる所もあったので、それを知った石山寺の仏の靈験によって、児を夢に見、その思いの深さを知ることができたと思った。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第4問

次の文章は、唐の詩人白居易の「不能忘情吟」と題する詩に自身が添えた序文である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）（配点 50）

樂<sup>(注1)</sup>天既<sup>(注2)</sup>老、又病<sup>(注2)</sup>風。乃<sup>(注2)</sup>録<sup>(注2)</sup>家事、会<sup>(注2)</sup>経費、去<sup>(注2)</sup>長物。妓<sup>(注3)</sup>有<sup>(注3)</sup>樊素者、年  
二十余。綽<sup>(注4)</sup>綽有<sup>(注4)</sup>歌舞態。善<sup>(注4)</sup>唱<sup>(注4)</sup>楊枝。人多<sup>(注4)</sup>以<sup>(注4)</sup>二曲名<sup>(注4)</sup>名<sup>(注4)</sup>之<sup>(注4)</sup>。由<sup>(注4)</sup>是名<sup>(注4)</sup>聞<sup>(注4)</sup>  
洛<sup>(注6)</sup>下。籍<sup>(注7)</sup>在<sup>(注7)</sup>経費中。将<sup>(注9)</sup>放<sup>(注9)</sup>之<sup>(注9)</sup>。馬有<sup>(注8)</sup>駱者、駟<sup>(注8)</sup>壯駿穩。乘<sup>(注8)</sup>之亦<sup>(注8)</sup>有<sup>(注8)</sup>年。  
籍<sup>(注8)</sup>在<sup>(注8)</sup>経物中。将<sup>(注9)</sup>鬻<sup>(注9)</sup>之<sup>(注9)</sup>。圉<sup>(注10)</sup>人牽<sup>(注10)</sup>馬出<sup>(注10)</sup>門。馬驤<sup>(注10)</sup>首反<sup>(注10)</sup>顧。一<sup>(注10)</sup>鳴。声<sup>(注10)</sup>音<sup>(注10)</sup>間。  
似<sup>(注10)</sup>知去而旋<sup>(注10)</sup>恋者。素聞<sup>(注10)</sup>馬嘶、慘<sup>(注10)</sup>然立<sup>(注10)</sup>且<sup>(注10)</sup>拜、婉<sup>(注10)</sup>變有<sup>(注10)</sup>辞。辞<sup>(注10)</sup>畢泣<sup>(注10)</sup>下。  
予聞<sup>(注10)</sup>素言、亦<sup>(注10)</sup>愍<sup>(注10)</sup>然不<sup>(注10)</sup>能<sup>(注10)</sup>对<sup>(注10)</sup>。且<sup>(注10)</sup>命<sup>(注10)</sup>廻<sup>(注10)</sup>勒<sup>(注10)</sup>反<sup>(注10)</sup>袂<sup>(注10)</sup>飲<sup>(注10)</sup>素酒。自<sup>(注10)</sup>飲<sup>(注10)</sup>一杯、  
快<sup>(注10)</sup>吟<sup>(注10)</sup>数十声、声<sup>(注10)</sup>成<sup>(注10)</sup>文、文<sup>(注10)</sup>無<sup>(注10)</sup>定句、句<sup>(注10)</sup>随<sup>(注10)</sup>吟之短<sup>(注10)</sup>長<sup>(注10)</sup>也。凡<sup>(注10)</sup>二百五十五  
言。噫、予<sup>(注10)</sup>非<sup>(注10)</sup>聖達、不<sup>(注10)</sup>能<sup>(注10)</sup>忘<sup>(注10)</sup>情。又不<sup>(注10)</sup>至<sup>(注10)</sup>於<sup>(注10)</sup>不<sup>(注10)</sup>及<sup>(注10)</sup>情者。事<sup>(注10)</sup>来<sup>(注10)</sup>攪<sup>(注10)</sup>情、情<sup>(注10)</sup>動不<sup>(注10)</sup>

可<sup>カラ</sup><sub>レ</sub>柅<sup>とどム</sup>。因<sup>リテ</sup>自<sup>ラ</sup>晒<sup>わらヒ</sup>、題<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>篇<sup>ニ</sup>曰<sup>ハク</sup>、「不<sup>ハ</sup>能<sup>ク</sup>忘<sup>ル</sup>情<sup>ヲ</sup>吟<sup>ト</sup>。」

(白居易<sup>はくきよい</sup>『白氏文集<sup>はくしもんじゆう</sup>』による)

(注) 1 楽天——白居易<sup>あざな</sup>の字。ここでは自称として用いられている。

2 病<sup>レ</sup>風——中風(脳卒中の後遺症で手足が麻痺<sup>まひ</sup>する病氣)にかかる。

3 妓——酒宴にはべり、歌や舞をする女性。

4 綽<sup>レ</sup>綽——優美なさま。

5 楊枝——樂曲の名。

6 洛下——洛陽。

7 籍在<sup>ニ</sup>經費中——出費の項目の一つとしてあげられている。「籍在<sup>ニ</sup>経物中」も同じ。

8 駟<sup>レ</sup>壯駿穩——元氣があり乗りやすいさま。

9 鬻——売る。

10 圉人——馬の飼育係。

11 婉嬖——若く美しいさま。

12 愍然——あわれむさま。

13 廻<sup>レ</sup>勒——馬の向きを変える。

14 反<sup>レ</sup>袂——袖口で涙を拭<sup>ふ</sup>く。

15 不<sup>レ</sup>及<sup>ル</sup>情者——情のない人。

問1 傍線部(1)「聞」・(2)「有年」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 29 ・ 30。

- (1) 「聞」
- 29
- ⑤ 慕われている
- ④ 知られている
- ③ 羨まれているうらや
- ② 記録されている
- ① 批判されている

- (2) 「有年」
- 30
- ⑤ 数年ぶりである
- ④ 年老いている
- ③ 何年もたっている
- ② 毎年のことである
- ① 今年限りである



問2 傍線部A「録家事、会経費、去長物」から読み取れる筆者の状況を説明したものとして最も適当なものを、次の

- ① ⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 31。

- ① 筆者は老齢で病気となり、子どものために遺産を残そうとしている。  
 ② 筆者は老齢で病気となり、余生に必要な家財を処分し始めている。  
 ③ 筆者は老齢で病気となり、人生に希望が持てず自暴自棄になっている。  
 ④ 筆者は老齢で病気となり、世俗とは縁を切つて隠棲しようとしている。  
 ⑤ 筆者は老齢で病気となり、せめて一日一日を存分に楽しもうとしている。

問3 波線部a、cの「之」はそれぞれ何を指すか。その組合せとして最も適当なものを、次の① ⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 32。

- |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| ⑤  | ④  | ③  | ②  | ①  |
| a  | a  | a  | a  | a  |
| 樊素 | 楽天 | 樊素 | 楽天 | 樊素 |
| b  | b  | b  | b  | b  |
| 樊素 | 駱  | 駱  | 樊素 | 樊素 |
| c  | c  | c  | c  | c  |
| 駱  | 圉人 | 圉人 | 駱  | 圉人 |

問4

傍線部B「声音間似知去而旋恋者」について、(i)返り点の付け方と書き下し文、(ii)その解釈として最も適当なものを、次の各群の①、⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

33

34

(i) 返り点の付け方と書き下し文

33

- ① 声音間似<sup>二</sup>知<sup>レ</sup>去<sup>一</sup>而旋恋者<sup>一</sup> 声音の間去るを知りて旋<sup>かへ</sup>つて恋ふる者に似たり
- ② 声音間似知<sup>二</sup>去<sup>一</sup>而旋恋者<sup>一</sup> 声音の間に似て去るも旋つて恋ふる者を知るなり
- ③ 声音間似<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>去<sup>一</sup>而旋恋者<sup>一</sup> 声音の間去るを知るに似て旋つて恋ふる者なり
- ④ 声音間似知<sup>二</sup>去<sup>一</sup>而旋恋<sup>二</sup>者<sup>一</sup> 声音の間に似て去りて旋つて恋を知る者なり
- ⑤ 声音間似<sup>下</sup>知<sup>二</sup>去<sup>一</sup>而旋恋<sup>二</sup>者<sup>上</sup> 声音の間去りて旋つて恋を知る者に似たり

(ii) 解釈

34

- ① 「駱」の鳴き声は、別れを望んでいた「樊素」の心情を代弁して消え去るかのようであった。
- ② 「駱」の鳴き声には、主人の死を予感して悲しみ悼む気持ちが込められているかのようであった。
- ③ 「駱」の鳴き声には、主人との別れを知って思いが募っているかのような響きがあった。
- ④ 「駱」の鳴き声は、やっと主人と別れることができたので心から喜んでいるかのような趣があった。
- ⑤ 「駱」の鳴き声は、「樊素」との別れを惜しむ主人の思いを理解しているかのように聞こえた。

問5 傍線部C「予<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>聖<sub>レ</sub>達<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>情」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 35。

- ① 予聖達に非<sub>あ</sub>ずして情を忘るるを能<sub>よ</sub>くせず
- ② 予聖達に非<sub>あ</sub>ざれば情を忘るる能<sub>あた</sub>はず
- ③ 予聖達を非<sub>そ</sub>るは情を忘るる能はざればなり
- ④ 予聖達に非<sub>そ</sub>ずんば情を忘れて能くせず
- ⑤ 予聖達に非らるるも情に忘れらるる能はず

問6

筆者が詩を作った経緯を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

- ① 老齢になり病に倒れた上に、詩さえも思うように作れなくなっていたが、「樊素」と別れの酒を酌み交わしているうちに、いつの間にか詩句を口ずさんでいた。
- ② 病気にかかり人生も残り少なくなつて、財産をなくし「樊素」にも見捨てられてしまったので、せめて詩人としての名声だけは失いたくないともがいていた。
- ③ 人生も残りわずかになつて、ようやく「樊素」のような素晴らしい女性に出会えたことを喜びつつも、なぜ若く元気な時に彼女に出会えなかったのかと運命を恨んだ。
- ④ 年を取り病気となつて「樊素」と別れ「駱」を手放す決意をしたが、「駱」の鳴き声を聞き「樊素」の別れの挨拶あいさつを受けると、惜別の思いを抑え切れなかった。
- ⑤ 年老いて病気となり自分には何も無くなつたと諦めていたが、「樊素」と別れずにすみ「駱」も手放さずにすむことになつたので、作詩の意欲が新たに湧き起こつてきた。







